

→物語の光と影—運命に翻弄された男の半生が始まる
2023年2月12日(日) カルチャーウォーキング
関西文学散歩 第577回 参加報告

刑務所と対峙する柔らかい山容は伽藍山という名だそう
だ。その昔、天智天皇の皇子・大友皇子(=弘文天皇)が「壬
申の乱」で、果てられた山だということだ。その頃、伽藍山
は新宮神社に属していたが、いまは、石山寺の境内地とな
っているらしい。

瀬田川の分流沿いに歩いて、新宮神社にたどり着く。奥
行きのある立派な神社だ。当社の古文書によれば、創建時
のご祭神は伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱で、また、紀州熊野新
宮社(速玉神社)のご分霊であるとも伝えられているそう
だ

が、速玉神社が江戸期に炎上していて記録がなく、真意は不明だそう
だ。

社の由緒話を宮司さんをお願いしてくれていたのか、ご本殿の前で、その宮司さんの話を
拝聴した後、控え所で昼食を採らせていただくことになった。新宮神社で毎年5月に開かれ
ている「石山祭」では、この新宮神社の古宮・三十八所権現社から出発するお神輿が石山寺
内の新宮へと練り歩くそう
だ。これも、ひょっとして大友皇子=弘文天皇が果てられた伽藍
山とゆかりがあるのかもしれない、と想像した。宮司さんの奥様が、茶の接待など、何かと
気を遣ってくれている。僕は、『冬の旅』の暗さを忘れ、この先の石山寺までの道程が楽しみ
になった。

石山寺の東大門に到着。ここは、天平19年(747)の開創という古い由緒を持つ。山内は、
文学にもなじみ深く、レジュメに、『蜻蛉日記』『更科日記』『和泉式部日記』にも登場し、『枕草
子』には「寺は壺坂、笠置、宝輪。霊山は、釈迦仏の御すみかなるがあはれなるなり。石山、粉
河、志賀」として記されている、とある。何よりも、紫式部が『源氏物語』の構想を練るために参
籠し、8月15日の名月の夜に「須磨」「明石」の着想を得たところとして名高い。

そのほかに、松尾芭蕉、島崎藤村の名が知られ、芭蕉の「石山の石にたばしるあられかな」
「あけぼのはまだむらさきにほととぎす」の句は、世に広く知られている。

さて、気が早いようだが、会の方から予告があったので、僕もついでに報告しておく。来
年のNHK大河ドラマは「光る君へ」。“紫式部自身の生涯と「源氏物語」の成立、をテーマに
するそう
だ。時は平安時代、藤原氏が台頭してくる世で、楽しみが一つ増えた。この3月18
日からは、ここ石山寺でも「石山寺と紫式部展—石山寺縁起絵巻 誕生700年」が開かれるそ
うだ。石山寺HPに「紫式部が参籠し『源氏物語』の構想を練ったという伝承が残る石山寺で
は、春と秋に石山寺の歴史や文化、ゆかりの紫式部と『源氏物語』にちなんだ展示を行って
います」と、あった。

是非、この機会に、ゆっくり石山寺を拝観してみたいものだ。ついでに、弘文天皇が祀ら
れているという伽藍山の中心にも行ってみることにしよう。



石山寺